

鴻臚館に行く光る君

——『源氏物語』と東アジア交易圏——

河添房江

- 一 はじめに
- 二 東アジア交易圏の形成
- 三 唐物の二つのルート
- 四 高麗を名乗る渤海国
- 五 平安時代の渤海国交易
- 六 『源氏物語』のなかの高麗人
- 七 大宰府貿易の変遷
- 八 梅枝巻と大宰府交易

本稿では、平安時代の日本と東アジアとの外交関係や交易事情をめぐる歴史叙述をふまえることで、新たに浮かび上がる『源氏物語』の世界像を提示したい。桐壺巻で鴻臚館に滞在した高麗の相人は、渤海国の使節であり、光源氏との対面は東アジア文化圏が崩壊し、日本と渤海国との外交が終焉する直前にもたれたという設定であった。高麗の相人が予言と贈物、そして桐壺巻末で明かされるように「光る君」の呼名を奉ったことは、主人公の人生を大きく決定することになったが、その背景に東アジア文化圏の崩壊から東アジア交易圏の形成という、平安前期の対外関係史の一大転換期があったことを明らかにしたい。

一 はじめに

平安時代の文化については、ともすれば唐風文化から国風文化へ移行したといった通念が出来あがってはいないだろうか。平安時代の初期は唐風文化が優勢であったが、寛平六年（八九四）の遣唐使廃止から、唐の文物の影響も薄れて、国風文化に推移したというのが、今日なおも一般的な理解かもしれない。さらに、こうした通念にしたがって、『源氏物語』は平安時代の国風文化の極みに花開いた、まさに国風文化を代表する文学作品という風に捉えられがちであった。

しかし現在の歴史学の成果は、遣唐使廃止により唐の文物が輸入されなかったのではなく、遣唐使を媒介とした朝貢貿易に拠らずとも、唐の文物が自由に手に入る環境があったればこそ、宇多朝が遣唐使廃止に踏み切れたことを教えてくれる。国風文化とは、鎖国のような文化環境で花開いたものではなく、唐の文物なしでは成り立たない、ある意味では国際色豊かな文化である¹⁾。

国風文化とは唐風文化の和様化の謂いであり、それは唐風文化の洗練と一般化による浸透にほかならなかった。

『源氏物語』も、また、こうした文化的土壌に花開いた作品であり、また思ひのほか唐の文物、いわゆる唐物に圍繞

され、それが横溢する世界である。さらにいえば、『源氏物語』には、広く対外関係に目をむけた箇所もあり、その限りでは国際感覚あふれる作品ともいうる。従来の国風文化についての常識を異化する歴史学の成果を踏まえた上で、唐物に注視し、『源氏物語』の世界と東アジア交易圏との関わりを見ていきたい。

そもそも国風文化を支えた唐の文物、唐物とは具体的にどのような品を指すのか。唐物とは、中国渡来の品ばかりでなく、朝鮮や南海から渡来する舶載品全般を指す言葉である。『源氏物語』の中にも、唐の紙や高麗紙などの紙類、錦や絹織物、紫檀などの貴木、蘇芳といった染料、瑠璃壺・杯といったガラス器など、唐物が豊富に散見される。また貴族生活に不可欠な薫物の原料は、沈香・丁子・薰陸・白檀・麝香をはじめとして、当時すべて海彼からの輸入に頼らねばならなかった。

唐物の品目をより詳しく知りたい時に、やや時代は下るが、平安末期に成立した藤原明衡の『新猿楽記』で、日宋交易の商人である「八郎真人」なる者が扱った五十二にもおよぶ品目が参考になる。

沈・麝香・衣比・丁子・甘松・薰陸・青木・竜腦・牛頭・雞舌・白檀・赤木・紫檀・蘇芳・陶砂・紅雪・紫雪・金益丹・銀益丹・紫金膏・巴豆・雄黄・可梨勒・

檳榔子・銅黃・綠青・燕脂・空青・丹・朱砂・胡粉・
豹虎皮・藤・茶碗・籠子・犀生角・水牛如意・瑪瑙帶・
瑠璃壺・綾・錦・羅・縠・緋の襟・象眼・縹緗・高麗軟錦・浮線綾・呉竹・甘竹・吹玉等なり。

等があげられている。これを分類すると、沈香より白檀までの一〇種類が広くアジアに産する香料（香藥）類、白檀・赤木・紫檀が貴木、蘇芳が染料、陶砂は陶土、紅雪以下檳榔子にいたる九種類は藥品、このうち雄黄は砒素の硫化物、可梨勒は緩下劑藥として貴族社会でさかんに服用された。「吉備大臣入唐絵卷」にも、吉備真備が唐の役人に可梨勒を飲まされた場面が描かれているほどである。次に銅黃以下胡粉まで六種類は顔料である。これらの品々は、宋で生産されたものばかりでなく、南海からもたらされた品々も多くふくまれ、海商とよばれる交易商人が、幅広い産地の唐物を扱っていたことが明らかである。

『新猿楽記』は、十一世紀半ばの成立とされるが、唐物の内容については九世紀以来大きな変化はなかったと思われる。これ以外にも、書籍や鸚鵡・孔雀・鵠・白鵝・羊・水牛・唐犬・唐猫・唐馬などの鳥獸類、唐紙・唐硯・唐墨などの文房具類がもたらされたことが知られている。

また、やはり『源氏物語』より時代は下るが、入宋した僧の成尋が著した『參天台五台山記』の延久四年（一〇七

二）十月十五日条では、宋の神宗皇帝から、日本では宋のどんな品物を求めるかと書状で尋ねられて、「香・葉・茶碗（碗）・錦・蘇芳等」と答えている。唐物でどのような品が日本で持てはやされ、垂涎の的であったかをうかがわせる格好の資料であろう。

二 東アジア交易圏の形成

ならば、こうした唐物入手するルートはどのように形成されたのであろうか。遣唐使が廃止された後の外交史や交易史の転機を、続いて東アジア世界の視点から問い直してみたい。一言でいえば、唐が滅亡した十世紀前半は、古代東アジア世界の国際的な政治秩序の崩壊期であり、かわって経済的な東アジア交易圏が形成された時期であった。この東アジア交易圏の形成の問題を、歴史学における東アジア世界論の展開から見ていこう。

戦前にあつては、近代国民国家の観点から一国史が追求されがちであつたが、戦後の歴史学ではその反省に立つて、世界史の文脈のなかで日本史を捉えようとする試みが、「東アジア世界」を合言葉に行われてきた。とくに古代史にあつて、「東アジア世界」の視点の有効性を説いて影響力があつたのが、西嶋定生の古代東アジア世界論であつた。そこでは、古代日本の歴史と文化を東アジアの歴史や文化

の一環として捉え返そうとする理論が展開されたのである。

西嶋はまず、中国王朝の政治的権力や權威によつて漢字・儒教・律令・漢訳仏教といった文化が伝播された世界として、東アジア文化圏を定義する。それは空間としていえば、中国・朝鮮・ヴェトナム・日本をさす。そして、その基盤として冊封体制―中国の皇帝と周辺諸民族の首長との間の官爵授受による政治圏形成を重視するのである。西嶋の冊封体制論については、冊封体制だけによつて東アジア文化圏を形成できるか、冊封体制は東アジア文化圏の一つの契機にすぎない、といった掘敏一説を受けた李成市の批判もある⁽⁴⁾。しかし、李成市も東アジア文化圏の形成を冊封体制のみならず、多様な要因からたどるべきだとするのであつて、古代における東アジア文化圏そのものの存在を否定するものではない。また李は、冊封体制に朝貢關係を加えて清代までの中華的秩序をみる濱下武志の説も紹介している。

遣唐使による朝貢が、中国文化の受容にぬきがたく重要な契機であつた一方、逆に日本が宗主国となつて冊封・朝貢による中華的秩序の形成は、海彼の使節を待遇する平安朝廷の原理でもあつた。六世紀以降、日本は冊封体制から離脱したが、それは東アジア文化圏からの離脱を意味するものではなかつた。六世紀以降の日本は百済・新羅を藩国

とみなし、蝦夷や隼人を夷狄とみなして、東夷の小帝國を自負していた。そのことが中国王朝との冊封關係から離脱しても、積極的に中国文化の摂取を必要とした理由と考えられる⁽⁵⁾。

しかし、十世紀初頭に唐が滅亡し、それと連動して周辺の諸國が減んだことにより、東アジア世界の国際的な政治秩序は崩壊し、かわつて経済上の東アジア交易圏が前景化し、文化圏をささえることになる。唐宋・五代における経済力の發展を背景として、国際的な政治秩序は崩壊した後、中国・朝鮮・ヴェトナム・日本を越えて東南アジア・インドまで、活発にして大規模な国際交易關係が出現したといふのである。ただし西嶋にひとつ批判を加えるとするれば、東アジア交易圏を支えたのは、中国社会の経済力ばかりでなく、諸國家の経済力の伸長があつた点を挙げられるだろう。

また西嶋は、東アジア交易圏の特徴として、森克己などに依拠しながら、経済的な交易圏を支える政治的機構の欠如、私貿易という形態、営利と共に海賊の危険を挙げている。しかし、東アジア交易圏を私的（民間）交易とするこゝについては、山内晋次⁽⁶⁾の鋭い批判もある。山内は、諸國家は自己の支配秩序へ私貿易を取り込むシステムを構築し、また海商側もそれを利用したとして、東アジア交易圏の実

態をより詳細にたどろうとしている。

三 唐物の二つのルート

ところで東アジア交易圏の中の日本で流通する唐物は、中国大陸から大宰府を経由してもたらされることが多かった。しかし、中国から舶載された唐物ばかりでなく、『源氏物語』の中には、別の交易ルートからもたらされた品々があり、それが案外、重要な役割を担っていることにも気づかされる。

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは、宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつれる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。

(桐壺三九―四〇)

右の「宇多帝の御誠」、いわゆる寛平の御遺誠から、かつて宇多朝の対外意識について、論じたこともあるが、ここでは「高麗人」という設定の意味から、この場面に注目

してみたい。

桐壺巻で、七歳の光源氏が高麗人の相人（人相見）から将来に関わる重大な予言を受けたことは、あまりにも名高いが、この相人の出自が、渤海国（六九八―九二六）からの使節として設定されていたことは、それほど知られていない。むしろ「高麗人」という表記からは、九三五年に新羅を滅ぼし、朝鮮を統一した高麗国からの来訪者をイメージさせるし、実際そのような説が有望視された時期もあった。『源氏物語』が成立した一条天皇の時代、朝鮮半島を支配していたのは、まぎれもなく高麗であったからである。

しかし、高麗と日本の間ではついに正式な国交は開かれず、平安京の迎賓館ともいふべき鴻臚館に使者が滞在したこともなかったからである。さらに、『源氏物語』の始発の桐壺巻は、作者紫式部が生きた一条朝より、ほぼ百年前の時代の雰囲気やイメージさせるように語り進められているとすれば、この「高麗人」は、高麗国が新羅を滅ぼす以前の使節とみるのが穏当であろう。

それでは、この「高麗人」が、新羅からの使節の可能性があるかといえば、新羅と日本の間は、当初の間は、正式な国交があったものの、七世紀後半から険悪な関係になり、平安時代には正式な国交も途絶えていた。新羅でないとなれば、平安時代の鴻臚館に滞在したのは、どこの国の使節

なのか。それが、新羅の北方に位置する渤海国なのである。

七世紀の終わりに建国され、唐を模倣した文化的国家として見る見るうちに頭角を表した渤海国は、しかし十世紀初頭に滅び、後代に継承する国を持たなかったためか、謎めいた存在として一九九〇年以降に、渤海国ブームを巻き起こした。渤海国の歴史や、日本との交流についても、その時期に調査が飛躍的に進展したのである。一九九〇年以降、上田雄・孫栄健『日本渤海交渉史』（六興出版、一九九〇）、上田雄『渤海国の謎』（講談社現代新書、一九九二）、中西進・安田喜憲編『謎の王国・渤海』（角川選書、一九九二）、「アジア遊学6 特集—渤海と古代東アジア」（勉誠出版、一九九九・七）、濱田耕作『渤海国興亡史』（吉川弘文館、二〇〇〇）、石井正敏『日本渤海関係史の研究』（吉川弘文館、二〇〇二）が相次いで出版された。こうした研究により、当時の渤海国の使節との交流や交易がいかなるものであったのか、その実態がかなり判明したので、以下それらの成果に導かれながら、平安時代の渤海国との文化交流と交易の実態を概観していきたい。

四 高麗を名乗る渤海国

中国の東北部、朝鮮半島よりさらに北の旧満州国の辺に建国された渤海国は、新羅によって滅ばされた高句麗の遺

民により建国された。日本に対しても、高句麗の後裔として、高麗国を名乗り、隣国の新羅とは緊張関係に陥りがちであった。それだけに大唐国や日本との外交を積極的に展開することで、文化的な国家を維持しようとしていたのである。

渤海国が最初に日本に使節を派遣したのは、神亀四年（七二七）九月に始まり、出羽に使節八人が到着し、翌年正月には、渤海郡王の大武芸の啓書（国書）を聖武天皇に差し出した。その際、国書には、「武芸、忝も列国に当たり、諸蕃を濫惣し、高麗の旧居を復して、扶余の遺俗を有てり」と自らを紹介し、高句麗の再興をめざした王権であることと、日本と隣好の交流を求めることを伝えて、あわせて貂皮三百張を献上した。続いて、大武芸を継承した大欽茂の使節が天平十一年（七三九）七月に出羽に到着した。同十月、平城京に入京し、大使が死亡していたため、副使が啓書と、信物（方物）と呼ばれる献上品として、大虫皮（虎皮）・熊皮各七張・豹皮六張・人參三十斤、蜜三斗を差し出したと、『続日本紀』には記されている。

さらに大欽茂は、天平勝宝四年（七五二）に第二回目の使節を送るが、九月に佐渡島に着いた使節は、翌年五月に入京して、啓書と信物を差し出した。この際、孝謙天皇から返された勅書には、『高麗旧記』を引用して、かつて日

本と高句麗とは君臣の關係にあり、高句麗の後裔を名乗る渤海の啓書に、日本の臣下であることを示す表現がないことを咎めている。その経緯は、唐との關係から日本と對等の外交關係を求める渤海と、臣下として朝貢の關係を求める日本の朝廷との間で葛藤が生じはじめたことを物語って、興味ぶかい。

その後、渤海国からの次の使節は、天平宝字（七五八）十二月に越前から入京し、大使の楊承慶は口奏で大欽茂を「高麗国王」とし、表面上は日本の姿勢に従うかのようにあった。そもそも唐に遣唐使を派遣し、朝貢をしている立場の日本が、「東夷の小帝国」を自負し、三韓時代の神話に固執して、渤海にも新羅にも日本への朝貢を求めたことは、国際外交の上では滑稽であった。そのため新羅との国交が断絶したのに対して、渤海は結局のところ実利を選んだというべきか。ともかくも、渤海国の使節がなぜ日本の朝廷で「高麗人」として扱われたのか、その起源をたどれば以上のような次第であった。

五 平安時代の渤海国交易

さて、渤海国からの日本への使節の来訪は、平安時代にも続き、平安遷都の翌年の延暦十四年（七九五）十一月、大欽茂の後継者の大高璘（ちかひら）からの使節が出羽に到着し、越後

国に移され、翌年、国書と方物を献じている。その後も渤海使の派遣は、醍醐朝の延喜十九年（九一九）まで、二十数回にも及んでいる。渤海使の当初の目的は、共通の敵である新羅を牽制しようとする軍事的なものだったが、平安期に入ると、むしろ文化交流や、交易の利を求める経済的な目的が主になってくる。渤海からの朝貢が建前である以上、使節のもたらす信物より、日本から返す信物の方がはるかに多かったからである。

渤海国の使節は日本海を渡り、おおむね出羽から若狭にかけて日本海側に寄岸した。そこから正式の使者と認められると、平安京の鴻臚館に迎え入れられた。平安朝廷は、渤海国からの使節を對等な国家使節としてではなく、あくまで朝貢使として接待し、官爵と回賜の品々を与えるという扱いであった。もとより使節は朝貢の信物をもたらすだけでなく、一方で抜け目なく交易用の品々（「遠物」「和市物」）を持参していたが、それは平安朝廷の建前からすれば、あくまで朝貢關係に付随する交易であったのである。渤海国の使節を賓客として受け入れることは、朝廷側の負担も大きいので、日本側から六年を一貢、さらに十二年を一紀として一貢と制限をもうけて、渤海側に申し入れた。それを守らない使節には、入京を許さないこともあったのである。

暗れて入京を許され、鴻臚館に到着した使節は、まず国書と、方物（信物）と世ばれる献上品を朝廷に差し出し、信物は内蔵寮に収められる。その後、使節には官位と朝服が与えられ、引見や賜宴の儀があった。また使節は、天皇や高官に別貢物と称する個人的な献上をしたり、鴻臚館で内蔵寮の官人と「遠物」（えんぶつ）（積んできた交易品）を交易したり、和市を開いての民間との交易がある場合もあった。この辺の事情については、『日本紀略』や『扶桑略記』に詳しい。主たる交易品は、最初の使節が貂皮三百張、二度目の使節が大虫皮・熊皮各七張・豹皮六張をもたらしただけに、毛皮であった。そして渤海側が朝貢の形をとった対価として朝廷から得たのが、絹・やうな・糸・綿などの繊維製品の原料であった。それは延喜式の規定に拠れば、「絹三十疋・くろ・純三十疋・糸二百紬・綿三百屯」であった。

渤海国使の信物の記録は決して多くはないが、貞観十三年（八七二）年暮に来朝し、翌年五月に入京した渤海国使の折も、大虫皮・熊皮各七張・豹皮六張・蜜五斗が信物としてもたらされたことが明らかになっている。この時は、朝廷への正式な信物のほかに、五月二十日にも内蔵寮と交易をおこない、翌日には平安京の官人、さらに二十二日に京市の商人とも交易したことが明らかになっている。さらに大使楊成規は、清和天皇と皇太子に別貢物として貂皮や

麝香、暗模靴を献上した⁽¹⁰⁾。他の渤海使の入京の折も、交易品として多量の毛皮がもたらされたであろうことは、延喜式の彈正令で貴族の着用の基準を定めていることからうかがえる。それは、渤海国からの毛皮が、平安京の冬の寒さを凌ぐ貴重品として、貴族の間でいかに重宝されたかを彷彿とさせる条令でもあったのである。

ところで、渤海国使を迎えて、入京から帰朝までの接待役となる渤海客使らには、眉目秀麗で漢詩文に熟達した文人が選ばれ、互いに共通理解のできる漢詩文を贈答することで、意志疎通をはかっていた。渤海国の使節の大使・副使クラスも、武官に替わって漢詩に秀でた文官が任命され、日本での詩宴にそなえることが多くなった。早くは『経国集』に天平勝宝四年（七五二）に来朝した渤海国副使楊泰師の漢詩二首が入集されている。特に弘仁年間（八一〇—八二三）では嵯峨天皇が渤海使の来朝を歓迎したこともあって、宮中で漢詩の宴がしばしば開かれ、たとえば『文華秀麗集』には、弘仁五年（八一四）年来朝した渤海国大使の王孝簾の詩や、それに応じた坂上今継などの詩が撰ばれている。また弘仁十二年（八二一）来朝した渤海使が豊楽殿での宴席で披露した打毬（ポロのような球技）に感激した嵯峨上皇と滋野貞主の漢詩が『経国集』に残されている。弘仁期と並んで貞観期（八五九—八七六）も文化交流は

盛んで、貞観十三年（八七二）十二月に渤海国使が来朝した折には、詩人としても官人としても頭角を現し始めた菅

原道真や都良香が渤海客使に選ばれている。また元慶六年（八八二）に渤海国大使の斐廻が来朝した際にも、菅原道真と嶋田忠臣という当代に並び称される文人がともに接待役となり、鴻臚館の送別の宴で交わした漢詩が『菅家文草』（道真の家集）や『田氏家集』（忠臣の家集）に十六首残されている。また、菅原道真はこの折、大使の斐廻をはじめ渤海国氏使が作った漢詩五十九首を軸に編集して、『鴻臚館贈答詩序』という序文をつけ、斐廻に贈ったらしい。その序に拠れば、斐廻には詩才があるので、道真は嶋田忠臣と相談の上、予め準備せず、その場で即興の詩をつくり、日本の風雅の水準の高さを示そうとしたのである（『菅家文草』巻七）。

六 『源氏物語』のなかの高麗人

『源氏物語』に話を戻すと、桐壺巻での第二皇子（後の光源氏）高麗の相人との対面では、前半の謎めいた予言ばかりがクローズアップされてきた観がある。しかし、渤海国の使節との文化交流や交易という面では、むしろ後半の相人と右大弁と第二皇子が漢詩を作り交わし、そして相人が七歳の第二皇子の異能ぶりを賛美して、渤海国から持参

した品々を多く贈ったという一節の方が、はるかに興味ぶかい問題をはらんでいる。

弁も、いと才かしこき博士にて、言ひかはしたることどもなむいと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、皇子もいとあはれるる句を作りましたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物賜す。

（桐壺四〇）

右大弁が送別の漢詩の名句を作ったのは、延喜八年（九〇八）六月、相人と右大弁と光源氏で交わされた漢詩の中で、大江朝綱「夏夜鴻臚館に於いて北客を餞すの序」（『本朝文粹』『古今著聞集』所収）の一節、

前途程遠し 思ひを雁山の暮雲に馳す 後会の期遙かなり 縷を鴻臚の暁の涙に霑す

が、大使斐廻を感じさせるほどの名句として人口に膾炙され、『和漢朗詠集』にも収められたことから連想された

いう説もあるほどである¹⁾。また、一説には、右大弁には、鴻臚館で活躍した左大弁菅原道真の面影があるともいわれる。たしかに相人と右大弁と光源氏の対面の場面は、天皇主催の賜宴より、日潮を代表する文人たちが、漢詩の才を競った鴻臚館の送別の宴の雰囲気をもとに作られたものである。鴻臚館でのさまざまな詩宴の記憶を、『源氏物語』では、三者が漢詩を交わすこの場面に溶かしこめたともいえるようか。

『源氏物語』に先行する長編物語『宇津保物語』の首巻「俊蔭」でも、

七歳になる年、父が高麗人にあふに、この七歳なる子、父をもどきて、高麗人と詩を作り交はしければ、おほやけ聞こしめして、あやしうめづらしきことなり。いかで試みてみたいと思すほどに、十二歳にてかうぶりしつ。
(俊蔭)

とあるように、七歳の俊蔭が父を見習って渤海国使と漢詩を作り交わした異能ぶりが賞賛されている。俊蔭の父清原の王も、菅原道真や紀長谷雄が歴任した式部大輔左大弁のポストにあり、おそらく渤海客使となって高麗人と会ったという場面設定であろう。つまり、「俊蔭」の場面も、日

潮の文人たちの鴻臚館での文化交流の経緯を踏まえたものであろうし、桐壺巻への影響が指摘されるところでもある。ただし、この条には渤海国との朝貢交易を暗示する記述がないのに対して、桐壺巻での高麗の相人の光源氏への贈り物は、むしろ渤海国からの朝貢品や交易品を連想させる。『源氏物語』が先蹤として「宇津保物語」だけを意識していたわけではないのは明らかで、「いみじき贈物ども」とは朝廷に収める「信物」や交易品の「遠物」の毛皮類より、かつて渤海大使の楊成規が清和天皇と皇太子に貂皮や麝香、暗模靴など洒落た品を献上したように、貴人への「別貢物」のようなイメージで捉えるべきかもしれない。

すでに述べたように、渤海国との通交については、日本が朝貢交易を求めたのに対して、渤海国が初回から対等の関係を求めていたという葛藤が、記録類には刻まれていた。しかし、『文華秀麗集』『経国集』の勅撰詩集をはじめ、『菅家文草』『田氏家集』『本朝文粹』からは、渤海国と日本の文人相互の美しい文化交流の幻想が紡がれるばかりである。桐壺巻では、こうした文化交流の場を意識しながら、相人と光源氏の一回的な交歓の場面を描き出したといえるうか。

そして敢えていえば、それは日本と渤海国との文化交流の終末の光景でもあった。渤海国はやがて衰亡し、その使

節は延喜十九年（九一九）を境に日本に來なくなり、都の鴻臚館を舞台とした文化交流や交易も途絶えたのである。

延喜年間には、高麗を称する渤海国との交渉が終焉すると同時に、また中国大陸との交易も変貌するという、対外関係史の上での一大転換期であった。言い換えれば、東アジア文化圏の崩壊から東アジア交易圏へと、歴史の流れが大きく切り換わった時期だったのである。

桐壺巻の高麗の相人も、渤海国の使節であり、光源氏との対面は、東アジア文化圏が崩壊し、日本と渤海国との外交が終焉する直前にもたれたという設定であった。高麗の相人が予言と贈物、そして桐壺巻末で明かされるように「光る君」の呼名を奉ったことは、主人公の人生を大きく決定することになったが、その背景にこうした歴史的経緯があったことを押さえておきたい。

七 大宰府貿易の変遷

最後に東アジア交易圏の形成という観点から、大宰府を経由した交易の変遷を振り返ってみたい。平安初期では、唐船が博多周辺に到着すると、大宰府はその報告を朝廷にし、日本での滞在を許可するか否かの伺いを立てる。朝廷から許可されると、唐船の乗員は、大宰府の出先機関である博多の鴻臚館に迎えられる。朝廷からは藏人所の官人か

ら唐物使が任命され、大宰府に派遣された。そして唐物使が、朝廷の必需品をまずは買いつけるといふ、いわゆる先買権を掌握した形で、交易が進められ、その後に民間との交易が許されるのが原則であった。¹²⁾ 延喜三年（九〇三）、大政官が出した禁制によると、唐船が到着した際、「諸院諸宮諸王臣家」が、つまり都に住む皇族や貴族層が争って使者を出して、「遠物」（交易品として積んできた唐物）を買い漁るので、その値段が釣り上がり、朝廷が先売権行使して適当な価で貨物を購入できないとして、皇族や貴族や社寺の諸使が関を越えて私的に唐物を買うことを禁止している。当時、いかに唐物が都の貴族や富裕な階層にもてはやされていたかがうかがわれよう。

ところが、延喜七年（九〇七）、大唐国がついに滅亡し、東アジア世界の国際秩序が崩壊し、それにもない醍醐朝が政策を転換しはじめたことも相俟って、朝廷が外国との交易を直接に管理しようとする規制力は弱まってくる。延喜九年（九〇九）、藏人所から派遣されていた唐物使を廃止して、必要品のリストを大宰府に送り、買い上げさせるという経費節減の方式がとられるようになった。もともとこの時、醍醐天皇は、買い上げさせた唐物と孔雀を親閲する「唐物御覧」により、唐物使廃止の制度とのバランスを取ろうとした。しかし延喜十一年（九一一）には、外商の

来航を三年に一度に規制し、鴻臚館で賓客としてもてなす費用も節減しようとした。山内晋次のいうように、中国海商との交易も国家が管理するという姿勢はくずさないものの、しばしばその権限を唐物使でなく、大宰府にゆだねる方針が採られたのである。その後、延喜十九年（九一九）に、唐物使は復活したものの、その後は在唐をくり返して、十二世紀にはまったく廃止されてしまう。

つまり延喜年間以降、日中貿易では、朝廷主導の交易から転じて、出先機関であった大宰府がしだいに唯一の窓口となり、対外貿易を管理する権限を一手に掌握するに至ったのである。権帥や大貳など大宰府の高官たちは、海外の珍品を入手する利権を享受することになる。紙・香・布をはじめ、貴族生活の優雅さに不可欠であった舶載品は、大宰府と直結し、博多の鴻臚館は、対外交渉の場というより交易所として繁栄をきわめたのである。

そこで権帥や大貳など大宰府の高官たちの利権に目をつけた摂関家は、自分たちの息のかかった人物や家司クラスを任命することで、良質の舶載品を確保するようになる。権帥や大貳は、朝廷から任された唐物の買い付けを行ったはかりでなく、摂関家に極上の唐物を献上した。こうした大宰府高官と摂関家の癒着の構造が、朝廷中心の対外貿易からの質的転換にさらに拍車をかけたのである。

対外貿易の利権を一手に掌握した大宰府の役人が、いかに巨額の私財を蓄えうる立場にあったか、史実に目を向けるならば、『小右記』に見える藤原隆家や藤原惟憲の例などに顕著である。ともあれ、東アジア文化圏の崩壊から東アジア交易圏の形成という推移、交易の形態が政治的な意味をもつ国家間の公的朝貢と交易から、海商による民間交易へシフトするという変化の兆しは、大宰府交易の変遷にものかがい見ることができるのである。

八 梅枝巻と大宰府交易

『源氏物語』の展開を先取りすることになるが、光源氏三十九歳の春を語る梅枝巻でも、大宰府の次官である大貳が、時の太政大臣である光源氏に香や綾・羅を献上したことが明らかにする。

正月のつごもりなれば、公私のどやかなるころほひに、薰物合はせたまふ。大貳の奉れる香ども御覧するに、なほいにしへのには劣りてやあらむと思して、二条院の御倉開けさせたまひて、唐の物ども取り渡させたまひて、御覧じくらぶるに、「錦、綾なども、なほ古き物こそなつかしうこまやかにはありけれ」とて、近き御しつらひのものの覆ひ、敷物、褥などの端どもに、故院の御世のはじめつ方、高麗人の奉れりける綾、

緋金錦なども、今の世の物に似ず、なほさまさま御覧じ当てつつせさせたまひて、このたびの綾、羅などは人々に賜す。

(梅枝四〇三—四)

梅枝巻の冒頭で、光源氏は、薫物をはじめ、愛娘である明石姫君の裳着の準備に没頭し、大宰大貳から献上された香料や綾・羅を検分している。明石姫君は裳着に続いて、すぐに東宮のもとへ入内の予定であり、裳着の調度はそのまま入内の調度となるので、光源氏もここぞとばかり力が入るのである。

ところで、この場面で大宰大貳からの献上品が明らかになる設定も、朝廷が先売権を掌握しようとした交易から、大宰府の管理にお任せの交易へと時代が推移した歴史的経緯を取り込んでいるだろう。しかし見落としてはならないのは、大貳が吟味に吟味を重ねて献上したであろう極上の唐物に、光源氏が手放して有難がつているわけではなく、むしろ旧邸の二条院の倉を久方ぶりに開いて、蓄えられていた古渡りの唐物と比較し、少しでも品質が落ちるものは、容赦なく女房たちに下げ渡ししていることである。そこには、大宰府の官人が交易を管理し、また時の権力者におもねる風儀に対する、一種の批判意識のようなものさえ感じられるのではないか。

そして、明石姫君の調度の敷物や褥などの縁には、まさ

に桐壺巻での高麗人からの贈物である綾や緋金錦を使うことにしたのである。同じ舶載品といっても、大貳の献上品と、高麗人の贈物では、時間的にいえば、ちょうど三十年のタイムラグがあるわけだが、この二種類の唐物には空間の上でも入手ルートにあなどりがたい差異があったのである。つまり梅枝巻では、渤海国交易、大宰府経由の貿易という二つの違う交易ルートからの唐物が交差している。しかも、そこには、交易ルートという空間の問題ばかりでなく、渤海国の交渉とその終焉や、また中国との交易も質的に変貌する対外関係史上の一大転換期という時間的変遷の意識も刻まれていたのである。

大宰府の官人たちが対外貿易への利権を有したことへの批判意識は、大宰府の三等官である大夫監を玉鬘巻で、夕顔の遣児玉鬘の求婚者として登場させ、戯画的に描いたところからかいま見れよう。

そもそも「監」という官職は、在地で任命される大宰府の三等官であり、さらに「大夫」がつくのは、監のなかでも、従五位に叙せられたという、いわば実力者である。その大夫監は、肥後国に一族の多い土着の豪族で、およそ玉鬘に釣り合ふ無骨者として紹介される。しかし彼が、大宰府での日中交易に直接に関わりうる立場にあったことは、玉鬘への求婚の手紙を送るに際して、

手などきたなげなう書きて、唐の色紙かうばしき香
に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉
ぞいとたみたりける。

(玉臺九五)

とあり、唐物を代表する「唐の色紙」や「かうばしき香」
を使っていることから明らかである。特に唐の紙は、鮮
やかな色彩と雲母刷りが特徴で、光源氏でさえも、朝顔姫
君や朧月夜といった相手の消息にしか使わないような貴重
な品であった。ここの「唐の色紙」は、田舎者まるだし
の大夫監には分不相応なものとして印象づけられている。

しかし、これは一方では、大夫監が太宰府の三等官として、
博多の鴻臚館での交易に直接関わりうる立場であったこと
を鮮やかに示す指標でもあろう。しかし、当時、台頭して
きた太宰府の在庁官人の典型ともいえる立場の大夫監を、
『源氏物語』では徹底的に戯画化することで、そうした交
易システムへの批判意識をあらわにしたともいえるのでは
ないか。

梅枝巻の冒頭の場面にもどると、いにしえの渤海国との
交流と、現在の大宰府經由の日宋貿易という二つの時代の
唐物が交差することで、光源氏は一面では他の登場人物た
ちよりも物質的に優位にあるという幻想をかきたてる。光
源氏は、そうした極上の唐物によって、物語の主人公とし
て荘厳されているともいえる。しかし一方で、太宰府交易

の舶載品を冷静に検分し、渤海国からの舶載品に軍配を上
げる光源氏がいることもまた事実である。『源氏物語』は、
十世紀の東アジア文化圏の崩壊から東アジア交易圏の形成
という歴史的経緯を踏まえながら、それへの批判意識をも
さりげなく滲ませたところに、東アジアの物語としての面
目をみせたともいえようか。

注

- (1) 榎本淳一「『国風文化』と中国文化」『古代を考える 唐と日本』吉川弘文館、一九九二。
- (2) 森克己『日宋文化交流の諸問題』国立書院、一九四八。
- (3) 西嶋定生『古代東アジア世界と日本』岩波現代文庫、二〇〇〇。
- (4) 李成市『東アジア文化圏の形成』山川ブックスレット、二〇〇〇。
- (5) 濱下武志『朝貢システムと近代アジア』岩波書店、一九九七。
- (6) 西嶋、前掲書、一四八頁。
- (7) 森克己『日宋貿易の研究』国立書院、一九四八。
- (8) 山内晋次『奈良平安朝の日本とアジア』吉川弘文館、二〇〇三。
- (9) 拙稿「源氏物語の時空意識」「解釈と鑑賞」二〇〇〇・一一二。
- (10) 濱田耕作『渤海国興亡史』吉川弘文館、二〇〇〇。

(11) 『新編日本古典文学全集 源氏物語一』補注。本文の引用もそれに拠る。

(12) 森克己『日宋貿易の研究』国立書院、一九四八、田村圓澄「大宰府、鴻臚館、そして博多商人」『大宰府探求』吉川弘文館、一九九〇。

(13) 保立道久『黄金国家』青木書店、二〇〇四。